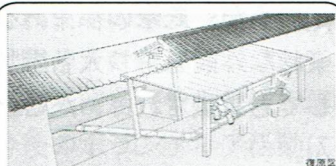


歴博をあるく

トイし事情の移り変わり

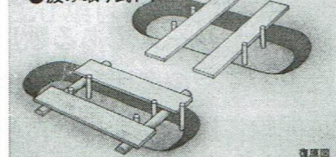
広報部会取材



●平城京の水洗式トイレ

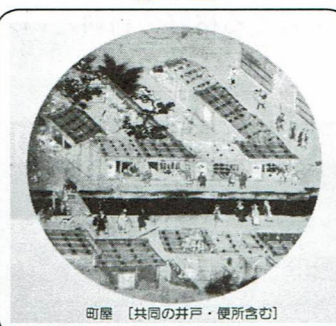


●汲み取り式トイレ



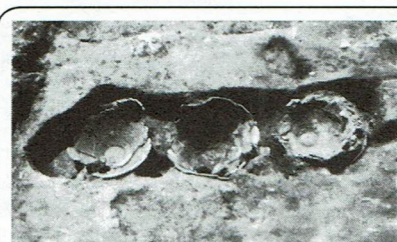
古代のトイレットペーパー——藁木

第1室



町屋 [共同の井戸・便所含む]

第2室



便所 日本橋一丁目遺跡 192～194a号遺構 1772 (明和9) 前後

トイレの遺構は、自然科学的研究などの進展により、1990年代に入ってようやく明確になった。(第1展示室パネルより)

哺乳類の中でもトイレを必要とするのは人間だけであり、古来より生活様式の変化とともに移り変わってきたトイレ事情を第1展示室から第6展示室まで見てみる事にした。

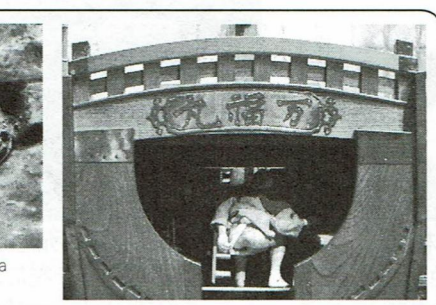
平城京には既に水洗トイレがあり、川の水を屋内へ引き込んでいた様で、色々な説はあるが、厠(川屋)の語源は、この天然水洗トイレの構造上の意味からも、最も近い説ではないだろうか。現代の水洗トイレに通ずるところがあり興味深い。藤原京からは汲み取り式トイレが発掘されており、その復元図から縦型と横型があったようである。

この時代は水洗式、汲み取り式以外に、いわゆる「おまる」や樋箱と言われる移動式、トイレとは言えないかもしれないが垂流し式、と地域特性や文化程度、生活環境等によりトイレ事情も様々であった様である。人間が二足歩行をする様になり、四足歩行の他の哺乳類とは異なり、排便が尻に付着してしまう事から、今で言うならトイレットペーパーが必要であった。原始時代はどの様にしていたかは定かでは無いが、多分樹木の葉っぱを用いていたのだろう。平城京の遺構などからは藁木と呼ばれる細い棒が見つかり、紙が貴重であったこの時代、トイレットペーパーの役割を果たしていた。

戦国時代の京の人々の暮らしを描いた洛中洛外図には共同便所を含んだ町屋が写し出されており、トイレ事情の一端が垣間見れる。

近世になり水上交通が発達し、長距離航路を活躍の舞台とした北前船のトイレ事情も第3展示室のジオラマから見る事が出来るが、この姿勢では揺れる船の中では大変な苦勞であったに違いない。江戸時代の便所の遺構が日本橋一丁目から見つかり、藤原京の遺構から見つかった汲み取り式トイレとほぼ形式は似通っている。この時代になると糞尿は畑の肥料としての価値が高く、汲み取り易さを損なわないような形状が考え出されていたと言われている。町の長屋では大家が共同便所の糞尿を売って金品を得ていたそうである。

戦後の復興とともに、団地の時代が到来する事になるが、まさに現代の水洗トイレが普及する事になるのである。



第3室



第6室